子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察  ⚬  大学サテライト施設でのアウトリーチ・サービス構築と相談実態・内容の整理  ⚬

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>寺村 ゆかの 伊藤 篤</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2011年2月28日</td>
</tr>
<tr>
<td>卷</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
大学サテライト施設におけるアウトリーチ・サービス

「ドロップインは、利用者がみずから「ひろば」に足を運ぶことによって成り立つサービスである。したがって、このサービスの利用者は何らかの方法で「ひろば」の存在を知り、そこで利用できる内容を知った上で「行ってみたい」「利用してみたい」という意思をもった人である。もちろん、相談だけを目指しての利用もあるので、利用者すべてではありませんにしろ、多くの利用者が特別な不安や深刻な悩みをもっているわけではない。そこで、地域の育て支援拠点事業の一義的な目的である次に述べるような目的・対象・方法を設定した。なお、このサービスは子育て支援拠点事業の一義的な目的である次に述べるような目的・対象・方法を設定した。なお、このサービスは二〇〇七年一月より開始したが、この対象条件に筆者らがバイロット・スタディとして試行的にこのサービスの実践研究をおこない、その効果を確認している。
中旬までの一コ月間にわたり、一名のアットリーチ・ワーカー

（便宜的にA・Bと呼ぶ）がかかかった相談の記録である、こ
の期間に限定したのは、Bが十二月中旬以降から、産前産後休
暇および育児休業を取得したためである。この期間にAが単独
でかかわった女性は四五名、Bが単独でかかわった女性は三三
名、二人で順次あるいは交互にかかわった女性は一四名であっ
た。全体では二九名の女性がこのサービスを利用した。

妊娠中に初回相談が始まったケースをカウントすると、Aが
八名、Bが五名であり、全体では約二八箇所の女性が「産前」
からこのサービスを利用していることがわかる。また、二回以上かわって
数を行った場合「A・Bで複数回の場面」で、Aのみに複
数回を行った女性は、「Aのみに複数回の場合Bのみに複
数回を行った場合」からこれを

結果（I）相談の開始時期と終了時期


一下、相談の開始時期と終了時期（継続ケースと終了事）

の内訳を示していく。

一○○一年九月末までのデータによると、いわゆる「介入的

を担当している女性は、あくまで詳しく述べるように、サテライト施

日本の台風支援活動と国際的な支援活動について

この台風支援活動は、日本の国際支援機関と関係機関が連携して実施されています。支援活動は、被災地の仮設住宅の整備、被災者の生活支援、医療支援、水分供給、電力供給など多岐にわたります。被災地の日常生活を再建するための支援活動は、被災者に大きな支援を提供しています。

国際的な支援活動は、他の国や地域の支援機関からの支援を受けています。これらの支援活動は、日本政府の外交政策と国際的な支援活動がますます重要になってきています。日本は、国際社会の一員として、地球温暖化防止や環境保全に積極的に貢献しています。
このアウトリーチ・サービスの相談回数の分布は明らかに多様である。

では、相談内容はどの程度多様であろうか。これまでの報告にあたってはいるが、これらはあくまでドロップイン・サービスに向けた相談実態から導出したものであり、アウトリーチ・サービスにおける相談実態から導出したものであり、アウトリーチ・サービスにおける相談は、サービスの対象を周産期にある女性に絞っている点で、このカテゴリが有効であろうとは言えない。したがって、ここでは、分析対象となる九の相談内容（総数は五四）を個々に整理・分類することを試みた。その結果を次に示す。

【子どもに関する相談】
一三八（総数の二五・五％）

【身体面の不安（妊娠中のトラブル・産後の体調不良など）】

【妊娠・出産中の不安（初産・双子妊娠・出産後）】

【障害児出産の恐れなど】

【出産後の不安（自信のなさ・家庭の不安など）】

【育児の不安（自信のなさ・家庭の不安など）】

【育児の負担・ストレス（家事育児が大変・夫の遅い帰宅・疲労感・出かける場所がない・産後うつなど）】
本稿では、筆者らが二〇〇七年一〇月より開始した、大学サテライト子育て支援施設を拠点とする周産期の女性を対象としたアウトリーチ・サービス的目的・方法等を紹介すると同時に、当該サービスにおける相談内容の整理・分析を試みた。その結果、主に次のような知見を得た。

相談が六回以上にわたる継続サービスは少なくなるが、二回以

上・六回未満のケースは経済利用者の約四〇パーセントと、か

々っつななたのは、サテライト施設の近隣（灌区内）の居住者

にほぼ限定されていた。

妊娠中から利用できるサービスであるにもかかわらず、総利

用者、約八パーセントが出産後から本サービスを利用している。ここから、育児にかかわる相談ニーズの多くは、出産

後に始まることが明らかにされた。

複数回の家庭訪問を含む長期のかかわりが必要とする一介人

の一な支援が必要な利用者も、少数ながら本サービスの対象

者となった。

本サービスは、産科施設での相談を主とした支援だけでなく、

体験的な資源利用につながるドキュメンタル・サービスの登録

利用につながることも目的としていたが、この登録

利用に

ようは推測できるが、これを取り扱う直接的な証拠はない。

一回あるいは複数回にかかわらず、本サービスにおける相談

内容を分析・整理したところ、子どもに関する相談よりも、

それ以外（女性自身にかかわる）の相談の方が多いことが明

らかになった。また、子どもに関する相談では、体重増加・

湿疹・混合栄養など出産後一年末満にかかわるものが多い

あること、子ども以外に関する相談では、「乳頭・乳頭

乳」という、やはり出産後一年末満に特有のカテゴリが抽出

された。

ワーカーBが産前産後休暇および育児休業を取得した時に、

二名ともいったんこのサービス提供を休止したが、ワーカーA

は二〇〇九年三月から、ワーカーBは二〇〇九年六月からサー

ビス提供を再開し、二名ともそれを二〇〇九年三月から続け

ている。今後の課題は、この期間での有効性や信頼性を確認すること、

および、この分析対象データから、「予防的」支援にとどまら

おわりに

からである。

テラライト子育て支援施設を拠点とする周産期の女性を対象とし

たアウトリーチ・サービスの目的・方法等を紹介すると同時に、

「介入的支援」になっていると予想される。「六の継続」の
「取り上げ」はその詳細を分析することである。「より深いニッ
ズを持つ少数の利用者への対応の実際とその効果を導出したい
と考えている。」

１．伊藤篤「子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関
する考察」大学サイライト施設における相談件数・相談内容
数の分析を通じて「心の危機と臨床の知」甲南大学人間科
学研究所 第一巻 二〇〇九年、五一三頁。

２．寺村ゆかの「子育て支援「つどいの広場」における相談
のあり方に関する考察」大学サイライト施設における
相談（二〇〇七年・二〇〇八年度）の分析を通じて「心の危
機と臨床の知」甲南大学人間科学研究 第一巻 二〇〇九年、九
一三頁。

３．須水進「子育支援とは何か」地域における子育て支援－須水
進編「子育て支援を考えるために」著者、二〇〇八年、五一三
頁。

４．寺村ゆかの「イニシャル・子育支援：地域における子育て
支援」甲南大学大学院人間社会研究科紀要 第一巻 二〇〇八
年、五一三頁。

５．丸山知子「特集 一産後女性の心理」とその支援
Depression Frontier 丸山知子、二〇〇九年、五一三
頁。

６．寺村ゆかの「早期からのドロップイン・サービス利用を促進させ
る一手法としてのベリネイタル・アウトリー者・サービス一子
どもの家庭福祉」日本の子ども家庭福祉学会 第九号、二〇〇一
年、五一三頁。

７．本サービスの介入的対応の内容と意義については今後別稿におい
て検討・報告する。

（てるもら）ゆか／助産学  子育て支援論

（いとう）あつし／子どもの家庭福祉論

104